

ルーズベルト就任顛末記
Roosevelt After Inauguration

ウィリー・リー こと ウィリアム・S・バロウス^{*1}

翻訳：山形浩生^{*2}

2005年5月8日

^{*1} ©1979 William S. Burroughs

^{*2} ©1996 山形浩生 <http://cruel.org/>. 委員会内部利用につき金無断転載.

目次

第1章	ルーズベルト就任顛末記	1
第2章	大統領になりたいと思わなくなったのはいつ？	5
第3章	その手の連中まるごと	9
第4章	教団と死	13
	訳者解説	17

第1章

ルーズベルト就任顛末記

大統領就任直後に、ルーズベルトはローマ皇帝の紫のローブをまとってホワイトハウスのバルコニーにあらわれ、目の見えない歯なしのライオンを金の鎖でつないで、内閣メンバーどもに指命を受けに来るよう号令をかけた。内閣の面々は、ブタどもにふさわしくブウブウキキ鼻を鳴らしながら階段を駆け上がる。

ブルックリン警察に「おспеのアニー」と呼ばれた老おかまが、統合参謀本部長に指命され、若手の参謀本部メンバーは、ペンタゴンの便所で語るもおぞましい猥褻行為の対象とされたため、それを避けるべく多くはオフィス内に屋外便所を設置。

議会図書館司書の職が、服装倒錯リジーに与えられた。彼女は即座に図書館から男を閉め出した。世界的に有名な文献学教授が、図書館に入ろうとしてマッチョなレズの男役の手にかかり、顎を割られた。図書館はレズビアンの乱交パーティーに明け渡され、リジーはそれを「倒錯処女の儀式」と名付けた。

年季の入った乞食が国務長官に任命され、己の職務の尊厳を無視して国務省の廊下で小銭をせびってまわる。

介抱強盗「地下鉄スリム」が国務省副長官と儀典局長に就任、スウェーデン大使館での晩餐会で、英国大使が「生き返った」。介抱強盗用語で、カモのポケットを探っている時にそいつが目覚ますことのために、イギリスと外向的な一悶着を起こした。

ぼん引きロニーは無任所大使となり、「秘書官」五〇人を連れて世界行脚にでかけ、その忌まわしい職に精を出した。

「エディー姉さん」として知られる女性のふりをした男は原子エネルギー委員会の委員長となり、物理学者たちを男性コーラスに仕立て上げて「アトミック・キッズ」として公演させる。

要するに、これまで国に対して忠誠をつくし、白髪まじりの歯抜けになった連中は、即座に極度の罵声をもって免職となったわけだ。たとえば、「老いぼれ爺さん、あんたク

びだよ。痔を抱えて消えちまいな」　そして多くの場合、本当に物理的にオフィスから放り出された。国の最高位の要職が、ごろつきや低級きわまるちんぴらどもだらけとなってしまう。このスキャンダラスな指名状況の一端を示すと：

財務長官は古参のヤク中「パントポン・マイク」。

FBI 長官は、トルコ風呂の係員で不道德なマッサージの専門家。

司法長官は人呼んで「ミンク」、使用済みコンドームを売りつける銭ごまかし詐欺師。

農業長官は「ナマズのルーク」、アラバマ州マンコ村のろくでなしで、二〇年にわたりパレゴリックとレモン汁でのんだくれている。

駐英大使には「つぶやきウィルソン」、靴屋でフェティシストを強請ってヘロインとコカインのミックス用の金を捻出していた男。

郵政大臣は「阿片小僧」、古参ジャンキーで落ち目の詐欺師。目下、「目をなおす」と称する詐術に挑戦中　ヤツの目に偽の白内障を植える（ヤツというのはカモから見た詐欺師のこと）　業界で最もお手軽な技の一つだ。

こうした醜悪なならず者どものでっちあげた制令の一部に対して最高裁が撤回命令を出すと、ルーズベルトはこれら威厳ある紳士がたを一人ずつ、議会便所の清掃員にするぞと脅して、紫尻のマントヒヒとの交合に身をゆだねさせたのだった。かくしてこれら高德の敬うべき諸賢は、醜悪に歯をむきだす類人猿の抱擁に身を任せ、その悲しむべき光景を、ルーズベルトと娼婦妻、そして老ごますり男ハリー・ホブキンスが、ハッシシの水パイプをまわしつつ、卑わいな笑い声を高らかにあげながら見物したのだった。ブラックストラップ判事はその場で肛門内出血を起こしてしまったが、ルーズベルトはただ笑って冷たく言い放った。「まだまだ蓄えはあるだろう」

ホブキンスは自分をおさえきれなくなって、狂ったようなけいれんとともに床をころげまわり、繰り返しかう言う。「もう死にそうですよ、大将。ほんと死にそう」

ホカトンスヴォール判事は類人猿に両耳を食いちぎられ、さらにハワード・P・ヘリンググスボーン裁判長が痔を理由に免除を願い出ると、ルーズベルトは猛然と言い放った。「痔に一番効くのは、ヒヒのちんぽを肛門に突っ込んでやることなんだぞ。だろ、ハリー？」

「その通りですとも、大将。わたしも他のものは使ったことはありませんや。おい、聞こえただろう。そのムシ喰いだらけのケツをそこの椅子にさらして、お客様の類人猿どのに、南部式の歓迎を味あわせてやりたまえ」

そしてルーズベルトは、「お隠れになった」ブラックストラップ判事の公認としてそのヒヒを指名した。

「そいつはいいや、大将」とホブキンスは、ばか笑い。

かくしてそれ以降、法廷における裁判は、キイキイとわめく類人猿がテーブル上で、ク

ソをたれ、小便を流し、せんずりをこいている中で行われ、判事のだれかにとびかかって引き裂いてしまうことも珍しくなかった。

「反対票を投じているというわけだ」とルーズベルトは邪悪な笑いを浮かべた。そうして生じた空席は、すべて類人猿が埋めることとなったので、やがて最高裁判所は紫ケツのヒヒ九匹でしめられることとなった。そしてルーズベルトは、かれらの判決を唯一理解できる人間と称して、米国最高の司法機関を牛耳るにいたった。

その後かれは、上院下院による制約を取り除くべく行動に出た。まず両院に無数のダニや害虫を放った。合図一つで突入し、床にウンコをするよう訓練した白痴や、プラスバンドと消防ホースを持ったヤジ軍団を養成。絶え間なく改修もさせた。現場作業員の軍団が両院を闊歩し、議員たちの顔を板ではたき、首筋に熱いタールを垂らして、削岩機で声をかき消す。さらには床にパワーショベルをすえつけて、反抗を続ける議員たちは生き埋めにされるか、水道本管が破られて両院が水浸しになった時に溺死する羽目となった。生存者たちは街頭で会議を続けようとしたが、滞留罪で逮捕されて、そこらの浮浪者のように作業場送りとなった。釈放後は、その犯罪歴のために免職となってしまった。

それからルーズベルトは、口にするのも恥ずかしいほど醜悪で放恣な行いに身をゆだねた。かれはコンテストをいくつか設立したが、それは人間という種が持つもっとも低級な行為や本能を流布させるように配慮されたものだった。それは「最も不快な行為コンテスト」や「低級インチキ競技会」、「小児猥褻週間」、「親友密告週間」　プロのチクリ屋は応募不可　そしてだれもがうらやむ「年間この世で最醜悪人コンテスト」の座。出場者の例：阿片座薬を祖母のケツから盗んだジャンキー、女装して最初の救命ボートに駆け込んだ船長、人工チンコを社会の窓にこっそりつけて、人を陥れる風紀取締まり警官。

ルーズベルトは現状の人間に対するあまりの憎悪に全身とらわれており、したがって人類を完膚無きまでに墮落させたがっていたのである。もっとも極端な人間行動でなければ我慢できない。平均的なもの、中年（かれの言う中年は、年齢的な中年とはまったく関係のない、ある状態のことだった）中流階級、官僚どもを見ると、かれは吐き気に襲われるのだった。かれの最初の政令は、ワシントンのすべての書類を燃やすことだった。何千人もの官僚が、自らその炎に身を投じた。

「くそつたれどもが、喜んで突然変異するようにしてやる」とかれは、墮落すべき新たなフロンティアを求めるかのように宇宙を見上げるのだった。

第2章

大統領になりたいと思わなくなったのはいつ？

もちろん生まれた時。それ以前かもしれない。この世でも、それ以前に調べおおせた何度かの前世でも、わたしは大統領になりたいと思ったことはない。この生来の決断は、読み書きできるようになって、大統領が赤ん坊をなでつつおためごかしを口走っているのを見たときに再確認された。わたしは後に原爆がつくられることになった、ロスアラモスの農場学校にいったんだが、広島上空で爆発する爆弾は、アメリカ国旗がすでにそこにあることを、夜を徹して証明してくれた。そこへハーディング大統領のもとでディーポット・ドーム・スキャンダルがやってきた。わたしはあの口に出したくもないガストン・ミーンズを忘れない。あの瘴気のような汚職事件における、悪名高き私立探偵にして仲立ち役。バーボンを飲んで葉巻を吸うロビイストやフィクサーだらけのホテルの一室に入って行って、洗濯物用のかごを床の真ん中におく。

「さ、いっぱいにしてもらおうか。その上で仕事の話だ」

わたしの若き理想主義が、この光景によって失われたなどと言うつもりはない。もうその頃には、物事に対して広い多様な見方をすることを学んでいたことでもあるし。わたしの政治的な野心は、もっとずっと慎ましく、人目につきにくい性質のものだった。あるときわたしは、セントルイス郡の下水長官になりたいと思った　月給三〇〇ドル、しかも己のクソまみれの手を贈賄資金につっこめる機会がごまんとある　そしてこれを狙ってわたしは、このような閑職がそれにふさわしい幸運な人物に与えられるようなソフトボールの試合に臨んだりしたものだ。わたしの会った連中は一人残らず、「わたしは歳とったナンタラで、カンタラに出馬しておりまして、いかなる形でもいいからご支援いただければ、感謝にたえません」と言うのだった。

この雰囲気に舞い上がったのと、ミンロジュレップ三杯とで、わたしの子供っぽい夢は

あおられて、わたしはすでにその念願の地位を手に入れた自分を思い描いた。この職は、週に二回ほど旧裁判所ビルに形ばかり顔をだし、手紙何通かにサインすればいいだけの仕事だ。そうそう、オフィスにいるんなら、ついでに保安官に電話して押収したマリファナを少しまわしてもらおう、それなりの対応を見せないと、前庭に下水管を通してやるぞ。……そして道をはさんだ裁判所カフェで、似たような職に就いているほかの怠けた無価値なくそったれどもとコーヒー、そしてみんなでワニのように汚職の中をころげまわるのだ。

ハーディングやニクソンのような、表だった場所には出たいと思ったことはない 責任をとったり、一日中握手して演説したり、年に一回は家族集合なんて。正気の人間なら、そんな仕事に就きたいなんて思うもんか。下水長官たるわたしは、赤ん坊をあやしたり演説したり、握手したり女王陛下と昼食をとったりするのにかり出されることはない。それどころか、選挙民でわたしを知るやつが少なければ少ないほど好都合。ライムライトは、王様や大統領どもに任せておこう。何キ口にもわたって下水管が破断する時の、メタンガスの匂いが好きだ 管路について取り引きして、わたしは三万ドルの家を手に入れ、それを可能にしたものの臭気の中で、セックス教団やドラッグ乱交が行われているという記事が新聞を飾る。わたしの農場スタイルの家の屋根から、ミントとマリファナの匂いを超えて、あの臭気が色づくそよ風に怠惰に漂い流れて運ばれてくる。

でも百姓どもからは、強硬な非難のつぶやきが聞こえてきた。「わたしのティーンエージの娘はマンコまでクソに浸かってる。これがアメリカ流の暮らしと言えるのか？」わたしはそう思ったし、それを変えたいとも思わなかった。そうやって自分の庭にすわって、保安官の大麻タバコを吸い、風に漂うメタンガスの匂いは、石油屋にとっての石油の匂いや牛肉王にとっての牛の糞の匂いと同じく、わが鼻孔に心地よい。あの管路の仕事は我ながらみごとだったし、仕上げも完璧。知事に関してわたしがつかんでいるネタは、新聞の一面に出たらあまり好ましくないと思うんですがねえ。それに、破壊行為や妨害工作に対しては、自前の特別警察を用意してある。その全員がハンサムな若者で、は虫類のように残酷かつ物憂く、新聞には下水のサルタン閣下の子分、従僕、ボディガードとして書かれるのみ。

この若者たちの想像は、延々と続く。そこへ地方長官候補者に出会う。かれは望遠鏡越しに焦点をあわせようとしている感じでわたしを見て、こう言った。「いかなる形でもいいからわたしがあなたを支援したら、わたしはそれを償却しますよ」。そしてわたしは自分の夢が目の前をすべりぬけて、過去のおぼろでちらつく彼方に退いていくのを感じた

あのみごうかたなきガラス戸の金文字「ウィリアム・S・バロウズ、衛生長官」が。なぜかわたしはうまく交差しなかったのだ。わたしはかれらの仲間じゃない。単に体型の

問題かもしれない。わたしのクラスメートの一部、太った皮肉っぽい運動の苦手な男の子たちで、肩が狭くてケツのでかかった連中は、出世して、やがて納税者の金二〇万ドルとありもしない橋だか高速道路だか、どっちか忘れたが、そんなものに関わるニュースで大見出しを飾った。これがずいぶん昔のことだ。それ以来、政治に関わろうと思ったことはない。下水のサルタンは、彼方の一九三〇年代のソフトボール試合に埋葬されて横たわっている。

第3章

その手の連中まるごと

法案六号は、一見してまがいものだ。六号が擬装しているものと、その実際の正体との差は、詐欺師のカバーと実際の隠された意図との差にも匹敵するほどのものだ。そこまで、信心深いブリッグスさんよ……かれらの正体はその果実によって知るがいい、その意図であると主張されていることによってではなく。まちがえてはならない。法案六号は、あらゆる少数派にとってきわめて深刻な脅威となり得る。ブリッグス上院議員は自らこう語っている。「わたしは同性愛者だけを相手にしたいわけじゃない。その手の連中をまるごと何とかしたいんだ」そして考えてもごらん。少数派をあわせると、人口の三割にも達してしまうのだ。

さて、法案六号は何と言ってるかな？ おやまあ おかまの粘液なんかから立ち上る、ろくでもない浸透性の瘴気かなんかによって、学校児童たちが同性愛を伝染されないよう保護しましょう。そしてわれわれは、同性愛扇動法案なるコンセプトの誕生を提示されることになる。生徒と教師の間の実際の行為については、もともと教職においては自明のこと。その仕事を続けたかったら、男女を問わず、その物欲しげな手は生徒たちから引っ込めとくんだね。そしてある種のお上品さがそこには出てくる。思い出すのは、四〇年前のミズーリ州セントルイス市メープルウッド高校の事件。ある先生は、教室から女子を全員外に出して、メイクをしてショールとカスタネットと耳のうしろにバラをさして、男子のためにスペイン語を教えたのだ。「カルメン」のタバコの歌は十八番で、高いファルセットで歌い、赤面している若者にバラを投げてやる。で、教職会議はそれが気に入らなかつた。なぜでもとにかく気に入らなかつた この人物はどっかおかしいということになって、ついにはカルメンの芸はよそでやれと通達が下つた。

既存の法律でカバーされている内容を扱う法律は、すべて悪法だし、納税者に余計な負担を強いることになる。そしてこんな、子供たちをホモセクシャルから守りましょうとかいうお題目は、単なる目くらましだ。ホモセクシャルによる強姦は、監獄の外では非

常にまれた。監獄内では、それは確かに問題となっている。ナイフをふりまわすような、マッチョタイプの同性愛者によって行われ、そいつらは同性愛者だという糾弾を不謹慎にも否定する。そしてこういう連中を外に出したら、こいつらはだぶん法案六号に賛成票を投じるだろう。犯罪者だって、自己中心的な偽善者になれるのだし、そうである場合は非常に多い。そして偽善的な南部人で、性根が盗人でないようなヤツには会ったことがない。信心深いろくでなしと取引するときは、何でも紙に書いておくこと。そいつの言うことなんか、クソの値打ちもありゃしない。だって神さまが、取引で相手をカモにする方法をそいつに教えて差し上げてるんだから。

確かに、同性愛の殺人鬼はいた。連中が指摘するのはジル・ド・レ　ただしかれは教会にはめられた可能性がある　そしてヒューストン殺人事件やゴミ袋連続殺人も指摘できるだろう。異性強姦事件は毎日何百となく行われているのに。ここにあるのは、コロラド州ポウルダーの二日分、「デイリーカメラ」紙からのもので、すべてポウルダー地区内の事件だ。

「強姦事件、未遂に終わる：悲鳴に助け到来」「性的攻撃で男逮捕、未成年を襲う」そう、これは少女相手だった……「男性が強盗され、その女性同伴者が強姦される」「武装した男による誘拐と強姦を母親が通報」ダグラス・I・ローク　立派なアングロサクソン名　は、生後二十三ヶ月の女兒を性的に攻撃して撲殺した罪に問われている。ロークは、クリスティー・リー・フロイドを性的に攻撃して死に至らしめた殺人罪にも問われている。まったく神よ。こんな醜聞をこれ以上読み続けたら、心臓発作が起きちまう。そう、どこかの哀れな女性に対する性的攻撃は、しばしば傷害や死に至るのだ。こちらは十五歳の女性ヒッチハイカー、強姦されて、両腕をひじで切断されてしまった。こんな連中がわれわれの子供を教えていいのでしょうか？　そしてこれがフェアでないと思うなら、ブリッグス自身が言っていることだが、「政治ではすべてがフェア（どんな手を使ってもいい）。こうしたキリスト教原理主義市民たちにお聞きしたいのだが、ヒッチハイクして危険なのは、十五歳の少年だろうか、少女だろうか？　答えは毎日の新聞に出ている。少年の死亡一人につき、死んだ女性は薪の束並に積み上げられるではないか。

さて、このブリッグス氏は心動かされる本を編集集中であり、それはヒューストン殺人事件と、SM雑誌からの写真を趣味よく選んだものになるとか。まあ、ブリッグス氏の南部連中ども用に、なかなか素敵な写真集ができあがることだろう。で、このくだらん話の背後にあるのは何だ？　得をするのはだれだ？　そう、まずブリッグス上院議員は得をする　あるいはそう願っている　得票や支援などの面で。アニタ・ブライアントも知名度で得をする。彼女はオレンジを吸っているただの女から、ニュースに出る名前になった。そろそろブリッグスとアニタは支持者たちとご対面すべきではないか。で、こちらは

アーサー・トム・ロブ、神の法再生のための白人委員会議長にして、アーカンサスのバスで刊行されている「たいまつ」なる下劣なスキャンダル紙の編集者。アーカンサスのバスで、老トム・ロブに勝るやつはいない。「勇気あるアニタ」を讃えてから、かれはすぐに委員会の本題に入る。「白人委員会は、あらゆる同性愛者の処刑を支持し、要求するものであることを公然と認めます。神の法は汚物のようなおかまどもに死刑を宣告しております。あの不潔なやつらすべてに！」さて、ここまでのトマスくんはただの足慣らし。こんなところで止まりはしない。ブリッグス同様、かれもその手の連中まるごとを狙っているのだ。かれはまた、「黒んぼども：すなわち獣」なる本の著者であり、その雑誌に繰り返しあられる言及を引用すると「どん欲で性的変態のユダヤ人ども」。神の法はユダヤ人どもにも適用してやるぞ、黒人にも、ヒスパニックにも、支那人にも。その手の連中を相当数処分できる　五千万人相当を殺そうってわけだ、その一部は抵抗するかもしれないけど。簡単に言い直すと、かれの言ってることは内戦に等しい。そしてアメリカの陸軍、海軍に警察が、街区ごとに暴動で荒れ果てて焼け落ちた都市で交戦し、発電所や貯水ダムが破壊され、ゲリラ集団が郊外部を闊歩し、武力が国境を越えてなだれこむようになったら、ロシア人や中国人はどうすると思うね。こいつはアメリカ合州国侵略を石に刻んで招待してるに等しいんじゃないかね？

さてもちろん、ブリッグス上院議員は、自分はトム・ロブみたいな気狂いとはまるで関係ないと主張するだろう。そうかな？　ブリッグスやアニタ・ブライアントが聴衆を集められるような場所には、必ずその中にトム・ロブ賛同者を見つけることができる。車のバンパーに「キリストのためにおかまを殺せ」とステッカーを貼るような連中だ。こういう人々こそあなたの票田なのですぞ、ブリッグス　かれらがいなければ、あなたの言うことなんかだれも聴きはしない。ブリッグス上院議員やその同類どもは、この国でいちばん無知で、偏狭で、ほとんど獣に等しい連中に訴えかけているのだ。さてブリッグスは、同性愛者はまともじゃないんだから、まともな人間扱いされなくて当然だと言う。キリスト教原理主義者にも同じせりふをお返ししよう。狂犬と同じで理性的じゃないんだから、理性的な人間扱いされなくて当然だ。癡狂院に隔離されるべきだ。あるいはヘビ使いにでもなるよう奨励されるべきだ。キングコブラや黒コブラ、ブッシュマスターやタイガースネークをたくさん輸入しよう　きみたち信心深い連中は、手をつっこんで信心を試してみたまえ。こういう連中からは、さぞおもしろい写真集ができるだろう。こちらはテキサス州キングスヴィルの警備員。黒人医師を列車の一等席からひきずりおろし、棍棒で目をえぐりだした。この写真のキャプションは「神の法」。

一九六八年、わたしは「紫イヤツやってくる」という短編を書いた（邦訳は『おぼえていないときもある』収録）。これは当時は超保守派だと思えた主張にのっって大統

領選に出馬する、紫ケツのマントヒヒの話だった。(以下、柳下毅一郎訳より引用)

(コピーの部分挿入)

しかしもしトム・ロブがいつの日か白馬にまたがって大統領選に出馬したとしたら、このホームー・マンドリルなんか中道リベラルみたいに見えるだろう。さあこちらは強硬派の南部サル、立候補演説を行いながら、悪意で燃え立つようだ。そしてこの演説にともなうのが、リンチや拷問、奴隷や大量虐殺など、ふさわしい写真群。みなさん、ロード・ジェフリー・アマハーストをご記憶だろう、あの勇敢で正直な兵士を「視界に入ったインディアンをすべて制圧し、それが終わるとほかにいないかを見回した男」。この歌は、この勇敢なる兵士が、はしかウィルスをつけた毛布を「視界に入った」インディアンに配ったのだということは語らない。それが終わるとほかにいないかを見回した男……

ティモシー・リアリーは、いずれ同性愛の菜食主義者と、アニタ・プライアントやブリッグスや右翼宣教師ジェリー・ファラウェルそしてもちろんかのトム・ロブのような連中と、それぞれ専用の別の宇宙ステーションができると言う。そう願いたいものだ。そうでないとこの国は、偏狭さと自己中心的な憎悪に蹂躪され、アメリカン・ドリームは永遠に破壊されてしまうかもしれない……そしてかのアメリカ色の偉大な詩人ジェームズ・ホワイトコーム・ライリーのことばを借りれば、「自由はしばし訂正されよう、そこに嘆く隠者を宿すべく」

第4章

教団と死

わたしの仮説では、芸術やあらゆる創造的思考の役割は、われわれが知っているのに、知っている却不知道なことについて、われわれに気がつかせてくれることだ。相手がすでに知らないことを教えるのは不可能だ。それは中世に海辺に住んでいた連中といっしょ。かれらは来る年も来る年も、船がマストから見えてくるのを眺めていた。そこでガリレオがかれらに入れ知恵すると、頭でっかちの異端者め、ということで火あぶりにしてしまう。でも何年かたつ間に頭を冷やし、とうとう認めざるを得なくなる。「確かに丸いよ。丸いんだ。昔からわかってた」。セザンヌは観客に、ある角度からある光の元で見た物体を見せたら、最初の展覧会では観客は、その絵を傘で攻撃した。でも、もうそんなことは起きないし、どんな子供でもセザンヌのキャンバスにあらわれる物体を認識できる。ジョイスは読者に、自分自身の意識の流れを認識させたが、理解不能の邪教を広めたとして糾弾された。

芸術の機能が、われわれが知っているのに、知っている却不知道なことについて、われわれに気がつかせてくれることであるなら、キリスト教会やその変種の機能とは、いまでも昔も、われわれが知っていることについて、無知な状態においておくことだった。海辺に住んでいる人々は、地球が丸いのを知っていた。でも、教会がそう言うから、平べったいと信じていた。そして頑迷なシナノン財団信奉者は、いまだにポール・モランツの郵便受けにあのガラガラヘビを入れたのが、シナノンを貶めようと言う陰謀だと本気で信じている。洗脳に限度ってものはないのだろうか。どうもないらし。シナノンやサイレントロジ、人民寺院のようなカルトは、キリスト教徒同じ感染源から生じている。それどころか、キリスト教世界の物語を一言一句たがわずにたどりなおしているのだ。ひどい病気の避けがたい進行のように、犯罪的な無知、強烈な愚鈍さ、自己中心的な偏狭さ、外部に対する被害妄想的な恐怖。カルト主義者にとって、精神医やメディア、政府機関はすべてサタンの生まれ変わりとなる。キリスト教原理主義者と同じで、自分たちこそが絶対的に正

しいのだ。

さてキリスト教は、無邪気な改宗者から見れば最初はいいものに思えた。愛と平和と慈悲　これのどこがいけない？　どこがいけないか教えてやろう　自称キリスト教徒どもによる、かつて類を見ない蛮行の数々だ。異端審問、コンキスタドール、アメリカのインディアン虐殺戦争、奴隷制、広島と、今日のアメリカ南部のバイブルベルト地帯。あのあたりで蒸留している、昔ながらの宗教は、宇宙船地球号の乗客すべてに対して危険をもたらすものでしかない。なぜこんなことが起きてしまったのだろう。そしてなぜ、キリスト教から派生する教団でもそういうことが起きるのだろう。そもそもキリスト教のどこがいけないのだろう。はじめにことばありき。そのことばは神である。

『二房性精神の崩壊に伴う意識の誕生』というおもしろい本がある。著者のジュリアン・ジェインズは、古代の神官王が異様な畏敬の対象となっていたのは、かれらが忠実なる臣民たちの脳内に、自分の声を作り出す能力があったからではないかと仮説を述べている。これは、脳の非優位半球を通じてやってくる神の声である。ジェインズは臨床的な裏付けを提出している。非優位半球を刺激すると、被験者には声が聞こえるのだ。溺死寸前で救われた自殺未遂者は、頭の中で自殺しろという声が聞こえて、どういうわけかその声には従わざるを得なかったという。もしカルトを始めたければ、まずはやがて熱心な追従者となるはずの連中の非優位脳半球に、自分の声を入り込ませることだ。サイエントロジーの教習には、L・ロン・ハバードの声のテープを何時間も聴かせるというのが含まれる。シナノンの創設者ディードリッヒの声はエアコンから漂ってくると言われたし、ジム・ジョーンズ神父はジョーンズタウンのラウドスピーカで、絶えず自分の声を流し続けていた。

第二ステップ。敵をつくること。カルト指導者に何が必要とって、敵ほど必要なものはない　本物でもでっちあげでもいい　そこから自分の信者を守ろうというわけだ。狂信的な敵をうまく設定できたら、このお手製の緊急事態に対処すべく、指導者はコマンドー部隊を設立する。サイエントロジーのシーオルグ、シナノンの帝国海兵隊、人民寺院の武装警備隊。こうした保護集団による攻撃的な行いは、外部からの反応を引き起こす。だって、政府のオフィスに侵入したり、人の郵便受けにガラガラヘビを入れたり、議員を殺したりすれば、そうなるに決まっているではないか。こうした反応による攻撃は、カルト教団が自ら招いたものなのだが、被害妄想を強化して、もっともっと強硬手段に出る方向に進むのだ。

自分の声を他人の精神に投影できる能力があるなら、以下にハウツーの青写真をお目にかけてよう。

反ガン寺院、略して ACT は、トビアス・アンソニー・クランプによって創設された。

かれは再生キリスト放射教会の自己流司祭だった。まずはニューヨーク州北部の、遺棄されたリゾートホテルを借り受けて、七日間の禁煙治療を低料金で行うと宣伝。この治療には、「別の精神」と称するものに植え込まれる暗示が影響していた。この暗示は、ヘッドホンを通じて処方される。これは教区民たちが、七日間の治療中、昼夜を問わず着用するように言われているものだ。この期間が終わる頃には、全教区民は寺院に残り、ACTに奉仕しようと決意する。ACT員になる特権の見返りとして、かれらは資産の割を寺院に寄進するように言われる。

クランプは繁栄し、資産も拡大した。治療のすんだ教区民たちには、ますます圧力がかけられ、禁煙コースが終わっても残るように説得された。治療はまだすんでいない、もし昔の住まいに戻ったら、必ずや再発して数年のうちにガンで死んでしまうとされるのだ。それに、かれらには他人を助けるという聖なる任務があるのだ。クランプの教えでは、ガンというのは地球制服をねらう金星人の陰謀なのだ。ガン組織にはエイリアンが着地して、目に見えぬ寄生体となり、生のあらゆる面で心身を侵略しているのだ。クランプ神父は週間でタブロイド新聞を刊行し、そのなかでACTのあらゆる敵に対して途方もない罪をきせるのだった。敵の一覧は、いまやタバコ会社、製薬会社、FDA、WHO、ガン研究協会、FBI、CIA、メディア、インターポール、国税庁、共産党まで含むようになっていた。典型的なマンガでは、アンクルサムが巨大なガン腫瘍を、カスタードパイのように顔に投げつけられている。「ロシアより愛をこめて」。

爆弾で寺院の別館の一部が破壊されると、クランプは超緊急非常事態宣言を発した。信者たちはいまや、この世の財産の半分と時間をすべてACTに捧げなくてはならなくなった。かれは、サタンの手先の敵どもに対して全面戦争を宣言する。ACTの記事のために派遣された調査記者が、謎めいた状況で失踪した時、教祖はそれに続く捜査が「あきらかに疑問の余地なく、政府機関がメディアと結託して当教団を弾圧しようと過去十年にわたり画策してきたという陰謀を証明するものだ」と宣言。

クランプ神父はACTの批判者に対し、無数の訴訟を起こした。それに伴う訴訟費用は、絶え間なく入ってくる金で十分にまかなえ、残りでかれは不動産を購入。いまやクランプは、フロリダ、ニューハンプシャー、イーストテキサス、モンタナに広大な土地を買って、信者のための寺院を設立。いまや信徒は何十万にまでふくれあがっていた。かれは、その全員が生物学的融合なるものを通じて一つの組織に融合しなくてはならないと説いた。残りの世界を征服しつつある金星ウィルスに対抗するには、これしかないというのだ。生物学的融合を推進するため、奇矯な集団セックス乱交やヌードフェスティバルが行われ、残存する抵抗感をうち砕き、キリストの放射する光を受け入れるのだとされた。暗黒放送を創設したが、これはその週に選ばれた敵に向けて、信徒たち沈黙の悪意を同期し

た時間に集中させるというもので、その名前と住所、写真がスクリーン上に現れる。信徒たちはいまや全財産を ACT に寄進するよう求められ、必要なら生き血を捧げる覚悟も必要だと言われる。教団離脱は死に値する犯罪行為とされた。格闘技の訓練が絶えず行われ、獣のような叫びやうめき声や威嚇音が、周辺何キロにも響きわたる。苦情を言う近所の住人はすべて敵のリストに加えられた。クランプは、手を挙げただけで、信者をさしむけ暗殺と妨害工作を一人でこなす神風任務を行わせることができると豪語。噂では核兵器も用意しているとのことで、東海岸一帯をカバーできるだけの神経ガスを持っているとも言われた。ある高官は、はっきりとこう語る。「かれはこの国の政府を、トランプの家のようにあっさり倒すことができる」。

リチャード・ニクソンはウォーターゲート事件で大統領のイメージを粉砕した。たぶん民衆ヒーローとして歴史に名を残すだろう。ジョーンズ神父は、自らを例にして、権威というものの根本的な基盤であるリーダーシップ原理に疑問符をもたらした。教会や軍隊、国家というのは、こうした指導者たちがわけがわかっており市民はそれに疑問をさしはさまずに大人しく従っていればいい、という信仰以外の何物でもないではないか。

自分があらゆる答えを知っていると信じているやつは、だれであれ頭がおかしい。そして頭がおかしい連中は、自分自身にとっても他人にとっても危険なのだ。宇宙船地球号は、気狂い教団を乗せておくには小さすぎ、混雑しすぎている。解決法は簡単。教会を免税にするのをやめよう。教会には倍の税金をかけるのだ。課税しまくって消し去ってしまおう。

訳者解説

本書は一九七九年にシティライツ出版から刊行されたパロウズの政治的エッセイと寸劇をまとめた『ルーズベルト就任顛末記』(Roosevelt after Inauguration)を、序文を除いて全訳したものである。序文を訳出しなかったのは、諸般の事情による。

表題作の『ルーズベルト就任顛末記』は、もともと『麻薬書簡』の一部だった。一九五三年頃に書かれ、邦訳(まあそう呼んでいいなら)では五十六ページの、「甲板でだれかが糞をたれ、旗で尻をぬぐう光景を見ても私はべつに驚かないだろう」という部分の後にこれが入っていたのだが、版元が削除。その後、リロイ・ジョーンズ編集のマイナー雑誌「Floating Bear」に掲載されたが、その号はわいせつ罪で押収されてしまい(おかげでジョーンズは牢屋行き)とうとう一九六四年に、FUCK YOU PRESS という名前からして超マイナーアングラ出版社から、なんと青焼きコピーで刊行されたという。現在のシティライツ版にはその青焼き版の表紙が掲載されているけれど、これがアレン・ギンズバーグの手書き(それもなぐり書き)の汚い代物で、ほとんどガキがSF大会で半日で作る、即席冗談ファンジンまがい。まあ実態もそんなものだったんだろうと想像される。

内容は、ルーズベルトがいかかわしい連中を政府の要職につけまくる話である。特に起承転結があるわけではなく、とりあえずその場のシチュエーションのノリだけで話をどんどん進めていく、パロウズお得意の「ルーチン」、つまりは小話である。実際にルーズベルトが、ローマ式のトーガをまとい、皇帝姿で宴会をしたことがあったそうで、まあリベラル派のパロウズは「けっ、はしゃぎやがって、いい気なもんだぜ」というので思いついた代物だろう。

「大統領になりたいと思わなくなったのはいつ?」は、もともと『ハーパーズ』誌の一九七五年三月号に掲載されたもの。編集者から、表題のような質問がパロウズに投げられ、それに対する回答として書かれたものだ。この現物を見る機会がなかったものの、書誌などでの記載を見ると、本書に収録されたものは、雑誌掲載文を少し削ってあるようだ。その削った分は、拙訳『パロウズという名の男』(ペヨトル工房)の「お利口さんに一言」なんかに使われている(何事も無駄のない人だ)。ここにある話以外に、そんな楽でおいしい閑職につくには、それなりにみんなに便宜をはかってやらなきゃなんないだろうから、

やっぱり思ったほど自由には動けまい、という趣旨の文が追加されている。

「その手の連中まるごと」は、書誌などにも記載がない。が、書き方からして、単行本向けという感じではない。時事問題を扱った雑誌向けの記事ではないかと想像されるが、不詳。一九七七年あたりの反ゲイ法案に対するコメントと、それをねたにした笑劇である。

「教団と死」は、どうやらこの本のための書き下ろしらしい。数年前から日本でも布教を開始したサイエントロジーや、ガイアナで集団自殺した人民寺院などの集団洗脳型カルトとその手口の解説。パロウズはむかしからサイエントロジーに対しては非常に手厳しく、独自にかなり調べているし、作品中でも何度となく（もちろん否定的に）取りあげている。マインドコントロール型のあらゆる団体に対するかれの反発は、昔から変わっていない。なお、この文は一九八七年にアメリカの現代思想雑誌「セミオテクスト」にも再録されている。

本書は、『ユリイカ』のパロウズ特集のために訳出したものである。